さかまた

鴨川シーワールド　NO. 46

シーワールドのアニマル達

●キタゾウアザラシのジャブ

1989年11月21日早朝、１頭のオスのゾウアザラシが伊豆諸島の新島に漂着しました。その後このアザラシは自力で海へもどりましたが、再び海岸に上陸したため、11月23日に保護され東京のサンシャイン国際水族館へ輸送されました。そして１年間飼育された後、繁殖を目的として本種の長期飼育の実績と飼育に適した施設がある当館へやってきました。このゾウアザラシは、日本へ漂着したことから名前は「ジャブ」(Japan Beached）と名付けられました。

キタゾウアザラシは、オスで体長５ｍ体重３ｔにもなり、鰭脚類の中ではミナミゾウアザラシについで２番目に大きくなる仲間です。本種はアメリカのカリフォルニア沿岸に生息していて、今回のように日本沿岸に漂着した例は大変珍しいことです。

搬入時は 265kgだった体重も現在では 2.5倍の674kgとなり、オスの特徴でもある鼻も立派になりました。繁殖期になると、その鼻をふくらませ、あたり一帯に響きわたる大きな鳴き声を一日中出しています。現在当館では４頭のキタゾウアザラシを飼育していますが、成熟したメスの「ラブ」との間には繁殖行動もみられ、２世誕生の期待が持たれています。　（関）

●ウツボ

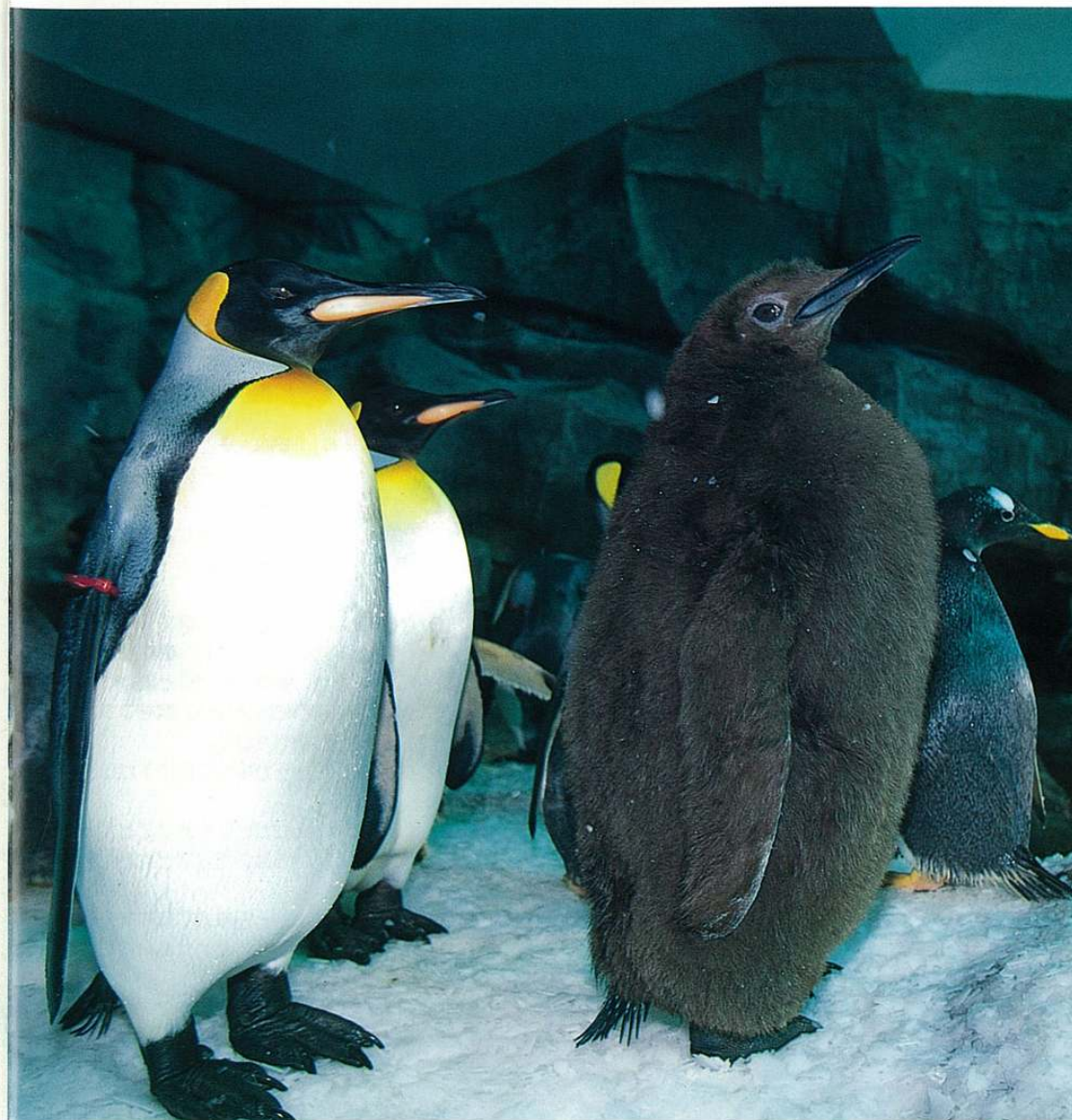
ウツボは本州以南の暖かい海に分布し、沿岸の岩礁付近で生活する魚です。ウナギに近い仲間でウナギ同様腹ビレがありませんが、ウツボは胸ビレも退化してありません。体色はクリーム色と褐色の複雑なまだら模様で、個体によって微妙に異なります。この体色の違いは飼育係にとって個体識別の重要な手がかりとなります。

夜行性である彼等は日中物影に隠れることを好みます。水族館に来たばかりのウツボに隠れ家となる岩や筒等を用意しておかないと、ヘビに似た体を利用して水槽の外へ逃げ出してしまうという神経質な一面があります。このようなウツボですが、ひとたびエサを食べる様になると、係員が手に持って差し出したエサも食べるほどよく慣れます。しかし不注意でエサごと手まで咬みつかれると、犬歯状の鋭い歯が口を閉じた時には内側に倒れ込むようになっているため、大怪我をこうむることになります。

ウツボは水槽の中ではあまり泳ぎまわらず、いつもじっとしていますが、他の魚より、ひときわお客様の目を引く魚のようです。一見、大きく肩で息をするように見える独得な呼吸の様子は、ヘビのような体形と派手な模様、そして凶暴そうな顔付きとあいまって、映画でいうなら存在感のある悪役といったところでしょうか。水族館にはなくてはならない人気者です。　（矢尾板）

▲キタゾウアザラシ　*Mirounga angustirostris*

▲ウツボ　*Gymnothorax kidako*

さかまた　No.46　（禁無断転載）

編集・発行　鴨川シーワールド

〒296 千葉県鴨川市東町1464－18

☎(04709)2－2121

発行日　平成７年12月

オウサマペンギンの繁殖

～ふ化から巣立ちまで～

▲もう腹の下には入れなくなりました。

南極周辺に生息するペンギンを展示しているペンギンズネイチャーでは、オウサマ、ジェンツー、マカロニ、イワトビの４種類のペンギン達が飼育されています。オウサマペンギンは、黒と白と黄の美しい体色をした、４種類の中では１番大きな体をしたペンギンで13羽います。その中の１羽は昨年９月に当館で初めて誕生した個体で、まだくちばしの横の黄色い模様が薄く、他のペンギン達とはなじめずにいます。自然界では一夫一婦制で、メスは卵を１つだけ産み、卵がふ化するまでオスとメスの共同で約２ヵ月間抱卵します。そしてふ化したヒナは親鳥とともに生活し、親から口移しで餌をもらいます。しかし、飼育しているオウサマペンギンでは、他の個体が子育てに参加することがあり、当館の場合も親以外の個体が子育てに参加しました。そこで今回はヒナが誕生し成鳥の姿になるまでの経過を飼育日誌からご紹介してみます。

1994年７月24日　産卵確認。母親（No.17）が足の甲の上に卵をのせ温めている。

８月７日　父親（No.14）が抱卵を交代。以後母親が主体で、時々父親と交代する。

９月11日　はし打ちが始まり、卵の一部が欠け始め、卵の中からヒナの鳴き声が聞こえる。

９月13日　朝５時50分ふ化確認。父親の足の甲と腹の間にいるヒナを確認したが、１時間20分後には母親は遊泳し、父親がヒナを探している様子だったので、飼育舎中を大捜索したところ、親ではない個体（No.12）がちゃっかりヒナを抱いていた。そしてヒナの鳴き声が聞こえ、腹の下から顔をのぞかせているのを見て一安心。そこで無理に親に戻さずにそのまま様子を見ることにする。

９月18日（６日目）　親代わりのNo.12が口移しでヒナに餌を与えているのを確認。ヒナをめぐる親との争いはない。

９月28日（16日目）　ヒナ、No.12の腹の下から出て全身を見せるがすぐに戻る。No.12への給餌は、ヒナを抱いているため、係員が近づくと翼やくちばしで攻撃し、思うようにできない。腕をつつかれながらもできるだけ食べさせる。

10月19日（37日目）　ヒナがNo.12の腹の下から出て動き回る。

10月23日（41日目）　No.12がヒナを離すことが多くなる。ヒナは腹の下からはみだすほど大きくなる。

10月24日（42日目）　No.12と母親が子育てを交代。No.12は約40日間の親代わりをつとめた後、初めてプールに入り泳ぐ。

10月25日（43日目）　母親とNo.12の他に２個体が子育てに参加。

10月26日（44日目）　計６個体が子育てに参加。ヒナを抱いていない個体でも、餌をねだるヒナの鳴き声に反応して餌を吐き出す行動が見られる。他の園館の例ではこの頃から係員が餌を与え始めていることや、親がほとんど消化していない餌を吐き出して与えるのを確認したことなどから、試しに消化のよいシシャモを与えたところ１本呑み込んだ。

10月30日（48日目）　母親は他の個体がヒナを抱いていると取り戻そうとする。

11月８日（57日目）　ふ化以後ヒナの面倒を見なかった父親も子育てに参加。

11月14日（63日目）　エサをシシャモからアジに変更。食欲強く350ｇを食べる。

11月22日（71日目）　単独でいることが多くなる。また係員の横で餌をねだるようになる。食欲強い。

12月６日（85日目）　他のペンギンに給餌をしている係員のひざの下にもぐり込んで眠る。

12月７日（86日目）　換羽が始まる。（左の翼下側の羽毛が抜け始めた。）

12月19日（98日目）　プールへ落ちる。自分の力で上陸できない。係員が助けあげた後、ビショビショの羽毛をタオルとドライヤーで乾かす。溺死等の事故を防止するため、夜間はプールのない場所に収容する。

1995年２月28日（169日目）　給餌時、係員のそばから離れない。アジを900ｇ食べる。

３月29日（198日目）　クォーという成鳥とおなじ鳴き声を出す。

４月５日（205日目）　食欲が不安定となる。

５月20日（250日目）　ヒナのまわりに抜け落ちた羽毛が多く見られる。両翼の換羽が進む。

６月17日（278日目）　下腹部の羽が抜け始めた。

６月18日（279日目）　再びプールに落ちる。頭部を水面に出して泳ぐが、自分で上陸できないので係員が助けあげる。腹部をおおっていた茶色の羽毛がずいぶん抜け、白い羽が現れる。

７月３日（294日目）
頭部の羽毛の下に黄色い模様がうっすらと見える。

７月15日（306日目）
換羽終了。黄色の模様やくちばしの色はまだはっきりしていない（幼鳥の特徴）。他は成鳥と同じ模様となる。

▲美しいペンギンに変身中

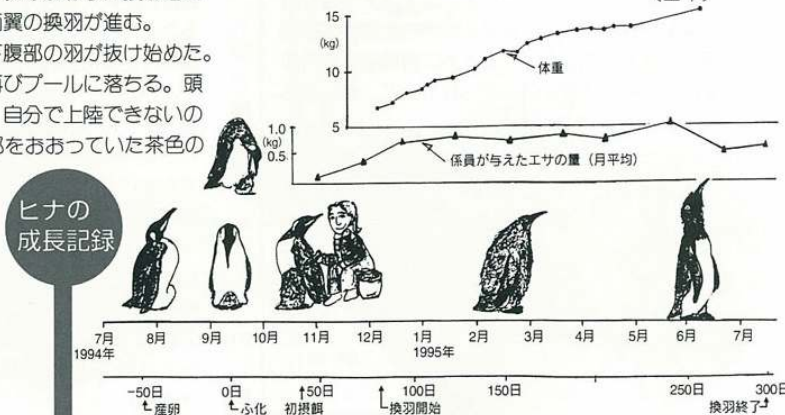
７月28日（319日目）　遊泳あり、自分で上陸できる。

７月30日（321日目）　プールのない場所への夜間収容を中止し、ペンギンズネイチャーでの終日飼育をはじめる。

換羽前の、柔らかな羽毛におおわれた、モコモコした姿の時は、「あのペンギンは何という種類ですか」とお客様によく質問をされました。ふ化してから１年以上たちましたが、係員の手から餌を食べるのもまだぎこちなく、時には係員の手までも餌と間違えてくわえてしまうこともあります。

当館ではオウサマペンギンの繁殖は初めてのことでまだまだわからないことが数多くあります。つき合いはまだ始まったばかりですが、これからも元気いっぱいに成長してほしいと願っています。

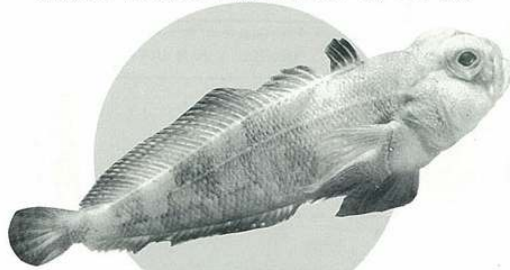
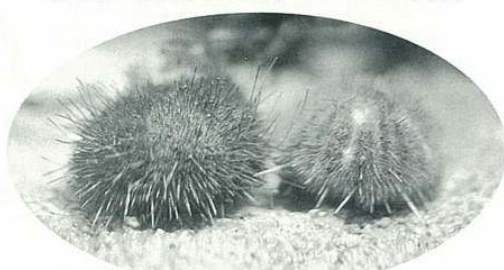
（田中）

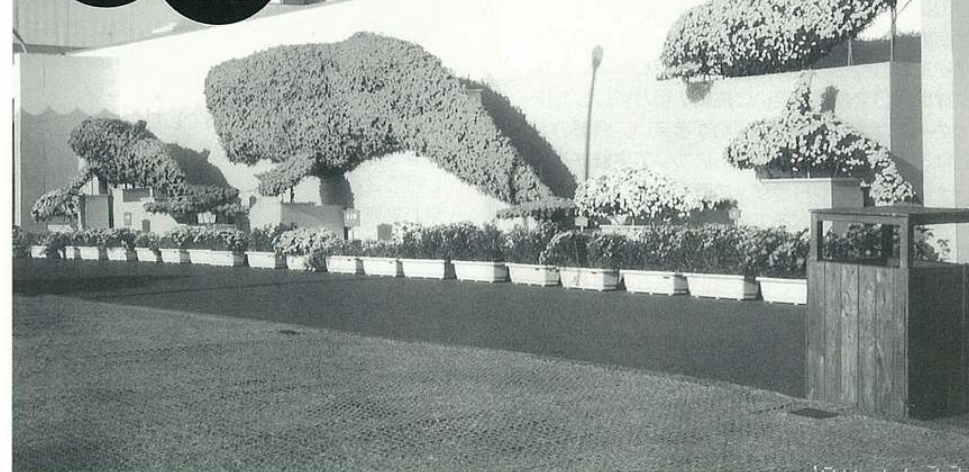
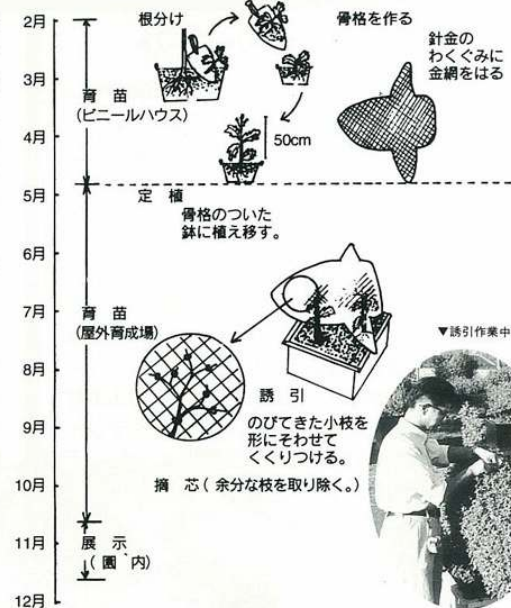
トピックス

南極の生物

—昭和基地を旅立ってから5,000日—

▲南極の生物展示風景

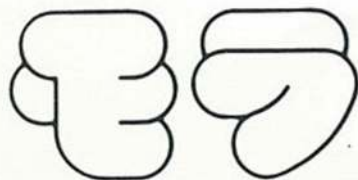
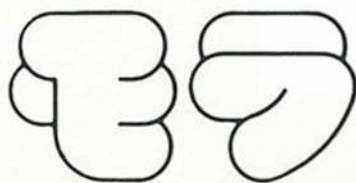
10月15日に、南極の生物達が昭和基地を出発してから5000日を迎えました。この生物達は昭和56年第23次南極地域観測隊により採集されたものですが、昭和57年４月20日より国立極地研究所からの委託を受け、当館で飼育を開始しました。

飼育はこれまでにショウワギスの産卵がみられたり、オキツノリがゆっくり成長発芽するなど順調に経過しています。現在、ショウワギスをはじめ、ヒモムシ、ウニ、ヒトデ、オキツノリの５種10点を一般公開しています。これら生物の飼育環境は、南極の海に近づけるために飼育展示室内部全体がマイナス２℃に設定されていて、さしずめ大きな冷蔵庫といったところです。室内での飼育作業は他の作業とはすこし趣が違います。給餌や水掃除のときには係員は防寒着を身につけますがほんの10分程で手足の感覚が無くなり、エサとなるエビの切身を指でつまむことが難しくなるほどです。このような特別な環境を維持するために、毎日２回の水温チェック、定期的な水質検査、庫内の空気を環流する扇風機のチェックなどを行い慎重に飼育を続けています。南極の生物を飼育することはとても難しいことですが、低温性生物や深海性生物の飼育に役立つ資料をこれからも集めていきたいと考えています。（入野）

▲ショウワギス *Trematomus bernacchii*

▲ウニの一種 *Sterchinus neumayeri*

海の動物 菊人形のできるまで

▲マッコウクジラとイルカ（完成図）

菊は日本の象徴的な花であり、秋になると各地で展示会が催されます。当館では、独得の造形をあしらった「海の動物菊花展」が今年で８年目を迎えました。作品はすべて当館の造園を担当するスタッフが制作し、これまでに長さ10mのマッコウクジラや高さ4.5mのペンギンなど大小合せて100体の創作を行いました。最近ではどうやって造るのかと作品の裏側をのぞきこむお客様の姿もよく見うけます。そこで、当館での動物の菊人形の造り方を簡単にご紹介しましょう。

菊の種類は「懸崖菊」で現在30種の中から作品の大きさや色合いによって選んでいます。造形は骨格作りから始めますが、針金で形を作り金網を張ります。魚は平面的に、イルカやペンギンなどは立体的に作ります。菊の花が咲いた情景を思い浮べながら動物の動きや表情が表現できるように整えるこの作業が、作品の出来ばえに大きく影響します。展示までの準備期間は、９ケ月かかりますが、11月には美しい花を咲かせ、楽しませてくれます。（榎本）

●海の動物菊人形造りの一年

▼誘引作業中

●特別展「水族館アイウォッチング」開催中

皆さんは水の中の生き物の目についてどのくらいのことをご存じでしょうか？ピノキオハウスでは水族館アイウォッチングーウオの目・タコの目・イルカの目ーと題した特別展が行われています。まずは入口で動物福笑いに挑戦／目かくしして作ったイシガキフグの顔に思わず苦笑い。会場の中には水中での光や目の仕組みについて実験するコーナーやマダコやトラザメの瞳を観察するコーナーなど、楽しく学べる工夫が盛りだくさんです。中でも人気はシャチやマンボウなどの動物の顔に目をつけるクイズで、目のない顔を前に首をかしげるお客様もいるようです。また園内の水槽の魚や動物達の目に注目して観察するためのパンフレット、「アイウォッチングシート」もご利用になり、新たな発見をして下さい。

（桐畑）

●アニマ・アウト・ガイド実施中

お客様と動物達との間の柵を取り除き、動物達にもっと間近にふれあい、親しんでいただくために、昨年12月よりペリカン、フンボルトペンギン、カメなどを飼育プールより園内に連れ出す試みを行ったところ、動物達の突然の訪問にびっくりするお客様も多く大変に好評でしたので、今年６月より「アニマ・アウト・ガイド」として年間を通し行うこととしました。この名称は、「外にやって来た動物をご紹介します」という意味をこめて名付けられました。現在は、ペリカンの散歩を１日２回行っており、水槽から出ることのできない魚達については係員がお客様の前に出て、餌を食べる様子などを見せ、紹介しています。この冬には園内を散歩するオウサマペンギンにも出合うこともできると思いますのでご期待ください。（村松）

●夏催事シャチのウォーターバースト

オーシャンスタジアムでは、夏休み期間の催し物として、夏の暑さを吹き飛ばしていただこうと「シャチのシャワープレゼント」を行っていました。昨年まではシャチが口に含んだ海水を参加者に勢いよくかけていましたが、今年の夏は大きな尾ビレを使い豪快に水しぶきをかける新しい種目の「ウォーターバースト」がおこなわれました。この種目は、シャチが水面でお腹を真横にしてゆっくりと泳ぎながら、おもいっきり尾ビレを振り、多量の水を遠くへ飛ばすもので、時にはシャワープレゼントに参加していないスタンド上段のお客様までもびしょ濡れになってしまうアクシデントもあり、パワーアップした「シャチのシャワープレゼント」に大きな歓声があがっていました。

（石川）

●県民の日にセイウチの石像公開

６月15日千葉県民の日に、セイウチの赤ちゃん「チャッキー」の１歳のバースデーパーティーで、重さ３ｔもあるセイウチの石像が公開されました。これは、多摩美術大学学生、山田慎也さんの卒業制作の作品で、作品名も「りっぱになったね」ということから、昨年日本で初めて生まれたチャッキーのために、鴨川シーワールドに寄贈してくれたものです。

当日は、石像が置いてある芝地にお客様や関係者が集まり、ネームプレートを設置したり花輪で飾るなど、和気あいあいとした雰囲気の中で石像が公開されました。

今では、ちびっこが石像の大きな背中に乗ったり、家族連れが写真を撮ったりと、来園者からも人気を博しています。

（大江）